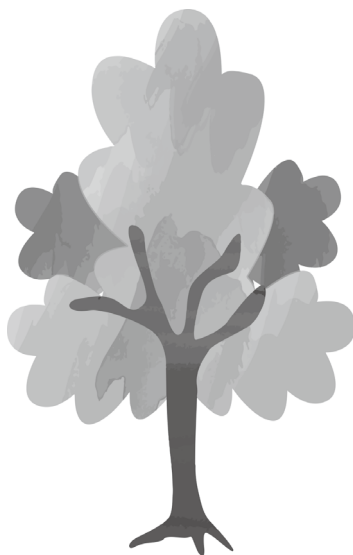


# 日本スポーツ心理学会認定 スポーツメンタルトレーニング指導士 ニュースレター

Certified Mental Training Consultant in Sport

**第19号**

2022年5月



I. 巻頭言(提言) 資格委員会委員長 立谷泰久(JISS) .....	1
II. 資質向上部門・資格審査部門・社会連携部門長の報告・抱負	
・武田大輔(東海大学) .....	3
・秋葉茂季(国士舘大学) .....	4
・菅生貴之(大阪体育大学) .....	5
III. 「日本スポーツ心理学会・スポーツメンタルトレーニング指導士資格認定 20周年 記念講演・シンポジウム」開催報告	
・武田大輔(東海大学) .....	6
・村山孝之(金沢大学) .....	8
・秋葉茂季(国士舘大学) .....	9
IV. 資格取得者の抱負	
・平間康允(札幌保健医療大学) .....	10
・高橋由衣(JISS) .....	11
V. 研修会・傍聴記	
・伊藤麻由美(帝塚山大学) .....	12
・小笠原佑衣(大阪体育大学大学院) .....	13
VI. 事務局からのお知らせ .....	15
VII. 編集後記:菅生貴之(大阪体育大学) .....	20

## I. 巻頭言 (提言)

### 「まず思え!」、そして更なるご活躍を!

資格委員会委員長 立谷 泰久 (JISS)

2021年度は、2つ(東京と北京)のオリンピック・パラリンピックが開催されました。1年間(年度)に、2つのオリンピック・パラリンピックが開催されるという異例の事態になり、対象競技のサポートをされている先生方にとっては、まさに大変な

1年間になったのではないかと思います。

また、2021年度の大きなイベントとしては、2021年12月11日に、「日本スポーツ心理学会・スポーツメンタルトレーニング(SMT)指導士資格認定20周年記念講演・シンポジウム」が開催(オ



ンライン) されました。これも COVID-19 の影響で1年延期になりましたが、無事開催することができました(詳細については武田委員が執筆されていますので、そちらをご覧ください)。僕個人の思いとしましては、10周年記念講演・シンポジウムの時も資格認定委員(当時)でしたので、今回も無事開催することができホッとしています。資格発足から21年を迎え、発足当初からご尽力された先生方におかれましても感慨深いと思いますし、現資格委員としても、今後もしっかりやらねばと思っていますところでは。

資格委員会の事務局を引き継ぎ、現在3年目を迎えています。やっと慣れてきたところではありますが、今年のスポート心理学会時で理事の任期を終えますので、事務局が変わる予定です。会員の皆様、資格取得の皆様には、ご迷惑をかけないよう引き継ぎをしっかりと行っていきます。またこの2年間で、資格委員会の事務局関係でご迷惑をおかけしたことも多々あったかと思えます。この場をお借りしてお詫びすると共に、ご容赦いただけますと幸いです。

話しは少し変わりますが、最近、SMT指導士の皆さんの活躍を耳にすることが増えてきたように感じています。例えば、東京と北京のオリンピック・パラリンピックにおいては、多数のSMT指導士の方々が、現場でたくさん活躍されたと聞いています。また、あるSMT指導士が、某プロチームの専属(専任)のメンタルサポートスタッフとして契約したケースもあります。今後もこのような活躍が益々増えていくことを期待しておりますし、そのためには、SMT指導士として更に『力をつける』ことが重要だと思えます。

2年前のニュースレターに、「SMT指導士の『ブランド力』アップ」ということを書かせていただきました。その中で、『『ブランド力』って何かということなのですが、平たく言えば、現場から『SMT指導士を持っている人なら大丈夫。任せら

れる』と言っていただけのことです」と述べました。2年後の今、先に述べたようにSMT指導士の活躍を耳にし、少しだけかもしれませんが、この点は進んだように感じています。また、そのニュースレターでは、「SMT指導士制度の設立の目的の5つあるうち、『3. 指導士としての専門性、責任性を高める』ことを第一に、また研修を積極的に受けることの重要性」についても述べました。研修会については、学会主催の全国研修会、そして地方・地域での研修会が多数開かれるようになり、かつオンラインでの参加も可能なため、受ける機会が増えました。対面での交流はないですが、オンラインを通してのグループワークなどがあり、充実した研修会になっていると思います。SMT指導士・学会員の皆さんには引き続き、研修活動の参加および立案・協力も含め、積極的に活動して欲しいと思います。

と少々かたい話しをしてしまいましたが、最近、サポート活動をしていて、「やっぱり、僕は、メンタルサポートが好きだなあ」と思うことが、しばしばあります。どういうタイミングかを書くとき長くなるので書きませんが、純粋にわき上がってきて、これが自分の活動の原動力になっていると改めて感じています。そして、この気持ちがあれば、自然と研修活動に参加するなどの自己研鑽を行うと思うのです。僕の師匠の長田一臣先生(日本体育大学名誉教授、2016年にご逝去)は、「まず思え! 思うことから人間の行動が始まる。強く思え!」とよくおっしゃっていました。皆さんには、ぜひ「メンタルサポートが好き」と強く思っていたきたいと勝手ながら思っております。

資格委員長としてのニュースレターは、今回で最後になると思います。少し早いですが、最後のご挨拶とさせていただきます。3年間、本当にありがとうございました!そして、これからも皆さんのご活躍に刺激を受けながら、自分も頑張っていきます!





II. 資質向上部門・資格審査部門・社会連携部門長の報告・抱負

## 2021 年度資格審査部門の活動の振り返り

資格審査部門長 武田 大輔 (東海大学)

本委員会での2年目の年度を終えようとしております。資格審査部門では、これまで通り、資格取得や移行・更新の審査手続き業務、新規取得申請者に対する資格取得講習会、指導士資格規定等の見直しを行いました。それぞれ振り返りながら、ここにご報告いたします。

審査手続き業務について、新規取得申請者は5名であり、そのうち4名が書類審査を通過し、最終審査を経て合格となりました。次年度から新たな4人がSMT指導士の仲間となります。資格を返納する日まで共に研鑽に務めたいところです。近年、書類審査で不合格となるケースがありますが、それは体育・スポーツ系大学の出身ではなく、資格取得に必要な授業科目の単位が足りないことが関係しております。現在のところは、科目等履修制度を利用して、関連授業科目を履修した後に、改めて申請してもらうことをお願いしております。そのような状況で申請してくださる会員は真摯な方ばかりで、たとえば他の関連資格をお持ちであっても、体育・スポーツの専門性を学ぶために、科目等履修制度を積極的に利用されております。とても嬉しく感じます。一方で、申請条件が整っていないのに書類を作成し、かつその書類に不備が多くあるにも関わらず申請してくる会員もおります。ひとつひとつの申請書類を確認し、申請者と関係があるだろうと思われる会員（多くの場合は指導教員）にも状況を確認しながら作業を進めており、これはかなりの労力を要します。指導士倫理綱領の前文には、「スポーツメンタルトレーニング指導士は常に自らの専門的な業務がスポーツ競技場面にいかかわるすべての人々の生活に重大な影響を与えるものであるという社会的責任を自覚しておく必要がある」とあります。資格取得の申請の所作に社会的自覚の程度も現れるのだと思います。

また、更新手続きには15名からの申請があり、1回目の更新者が7名、2回目が1名、3回目4名、4回目3名といった内訳でした。13名が合格し、2名が不合格となりました。移行については、今回が3回目の更新となる指導士1名が審査に合格し、上級指導士へとなられました。更新に関する近年の不合格についてはさまざまな理由があるのですが、資格更新の条件を十分に理解されず、ご自身の判断で研修実績などを解釈されている場合が含まれます。研修実績は、自身の資質を研鑽するためのものであります。資質向上部門においては、資格委員会主催の研修会の企画だけでなく、各地域での研修会を紹介しております。その一部の研修会は、資格委員会主催と同等として認められる点数にもなります。主体的にかつ積極的に学会ウェブを訪れ、最新の情報を確認するようお願いいたします。また、指導実績については、いわゆるレクチャーのようなものは、今後は指導実績としてみなすかどうかを検討されていくと思われれます。スポーツメンタルトレーニングに関するレクチャーであれば、本資格を持っていない方も、スポーツ心理学会員として活躍している方なら誰でも講義ができると考えるからです。つまり、個人あるいは集団に具体的な心理専門的関わりを伴った内容を指導実績としていくことです。スポーツ実践の指導（コーチング）との区別は簡単でなく、当然ながら資格規定等の見直しとも関わるので、これらは今後に議論が展開されると思います。今現在においては、資格保有者それぞれが自身の日頃の活動がこの資格に支えられるものであり、そして自身の活動がこの資格の価値を高めているかどうかを考えていただくことをお願いする次第です。なお、何らかの事情において更新年に手続きできない場合は、更新手続きの猶予を依頼する申請ができます。資格申請規則の第4条をご確認



\*\*\*\*\*

ください。

次に、新規資格取得の手続きの過程で行われた資格取得講習会についてです。2020年度と同じく、本学会会長と資格委員会委員が担当し、それぞれがリモートにて講義を行いました。“学術団体が認定する資格”であることを念頭に、山本裕二会長から「資格と責務」というテーマで最初に登壇いただきました。昨年同様に、資格保有者である前に、スポーツ心理学会会員として研究活動が続けることの意義を改めて考えることができたと思います。エビデンスに基づく支援は多くの領域で言われていることですが、そのエビデンスとは何を持ってエビデンスというのかを考えるとところからはじめなくてはいけないのでしょうか。昨今蔓延する無味乾燥な業績主義、表層的なインパクトファクターの範疇を超えたスポーツ心理学研究を考えることも、本資格の価値や責任と関わると思います。会長のレクチャーに続き、委員会委員の経験をベースにしながら、「対象者の特性・特徴を考えたサポートの重要性(立谷先生)」、「SMT指導士の社会連携における情報発信の際の注意点(菅生先生)」、「自己研鑽の意義と資質向上の機会(秋葉先生)」、「事例検討をすることの意味(武田)」と、これも昨年と同様のテーマで講義が行われました。同じテ

マでも、“いつ”、“どこで”、“誰と共にする場”によって講義の展開は独自のとなり、参加者それぞれの体験様式は異なります。私個人の印象ですが、今年度も受講する側、講義する側それぞれに有意義な時間になったと思います。

さて、昨年のニュースレターでは、現在において指導士に求められる支援サービスに相応しい規定や規則になるようその内容を見直したいと述べました。専門的な支援内容の見直しには至ることはできず、資格申請手続き業務を行う中で生じるさまざまな不整合性について修正するに留まったと反省しております。2021年度においては、資格制度規定第8条、資格認定規則第2条、第3条、第4条、名誉指導士に関する内規に改正が施されました。また、資格申請・更新手続きに関する申請書類の書式も修正されております。それぞれご確認ください。

本委員会の任期は2022年度の学会大会までとなっております。今後は、次期委員会にうまく接続されるよう課題を整理したいと考えております。資格保有者の学会員、今後取得を目指す学会員だけでなく、すべての会員に本資格に関心を持っていただき、会員相互で本資格の社会的価値を高めていくことにご協力をお願いする次第です。

## 今年度の資質向上部門活動の振り返り

資質向上部門長 秋葉 茂季(国士舘大学)

私が資質向上部門の部門長を仰せつかり2年半となります。これまでの期間は新型コロナウイルスの蔓延による社会情勢の混乱と共にありました。研修会の開催に際し幾度となく困難な状況に見舞われていきましたが、部門員の先生方に支えて頂きなんとか沈まずに進んで来れているという状況です。本年度は、全国研修会と地域での研修会に加え、一度開催を見送り延期させていただいた「SMT指導士資格認定20周年記念講演・シンポジウム」も開催することができました。ご尽力いただいた皆様には心より感謝申し上げます。ありが

とうございました。一つ大役を終え安堵の気持ちではありますが、部門長に就任した当初に掲げていた目標については道半ばだと思っています。

今一度になりますが、前任の武田先生が掲げていた研修会のコンセプトを振り返りますと、全国研修会においては「基礎的なことを学ぶ」、「スポーツ心理学領域から学ぶ」というものでした。「基礎的なことを学ぶ」は主に若手の先生方からあげられた「実践場面において生きる知識や現場での態度・振る舞などを学びたい」という意見・要望に応えるものだったと記憶しています。「スポーツ心

\*\*\*\*\*



理学領域から学ぶ」は、スポーツ心理学を学問背景とした専門家となることで、他の心理職とは異なる独自性を見出せるということが重要視されていたことと思います。これらのコンセプトをもとに3年間実施された後、私が引き継ぎました。そして、これらの基本的なコンセプトはそのままに、内容を深めるための取り組みを推進していくことが当初の目標として掲げたところでした。具体的には二つあり、一つは、全国研修会だけでなくコンセプトを地域で実施される研修会の際にも落とし込むということでした。そして、もう一つが地域で開催される小規模な事例検討会を増やすということでした。一つ目の課題は、全国研修会では、若手の先生がご自身の考えや思い、疑問を発言することが難しい状況にあることが背景にあります。内にとどめ考えや思いを抱えることも心理の実践家としては良いトレーニングにならぬので、発言できないこと自体がネガティブなことだとは思いません。ただ、思ったことを発言し他者や有識者の先生方と議論することで深まる知識もあります。そこで、全国研修会で取り上げたテーマを地域での研修会においても再度取り上げて、地域の研修会では上級指導士の先生方だけでなく、

若手の資格取得者や資格取得を目指す方も含めて議論する機会も設けることを推進しました。この点に関しては、ある程度実行もできている状況です。一方で、二つ目の課題は、なかなか進められていない状況です。加えて、コロナ禍によりオンライン形式での事例検討会についても指針を示す必要がありましたが、これについても具体的に示せていない状況です。資質向上部門では、多くの事例に触れることで自身の経験以上の経験値が得られるという理由から、地域での研修会において事例検討会の積極的な実施を促しています。しかし、オンライン形式で行う事例検討会では資料提示によるプライバシーの保護など難しい面が多々あります。現状、資質向上部門として望ましい開催方法・形式を提示できていないため、多くの地域で実施を見合わせ、代替的な研修を組むことでこの点を補っていただいている状況です。ましてや新たに小規模での事例検討会を増やすにはいたっておりません。来年度は現在のメンバーで実施する最後の期間となりますので、上述の点を少しでも前に進められるように努力していきたいと考えています。

## 社会連携部門の今後の活動に向けて

社会連携部門長 菅生 貴之 (大阪体育大学)

今年度社会連携部門においては、筆者自身の環境要因と、未だ猛威を振るう新型コロナに伴う情勢の変化への対応の不手際で、目指すべき事業に取り組むことができませんでした。私自身の力不足を痛感させられた一年となってしまい、関係各所にはお詫びをしなくてはなりません。

そのような環境下で、社会連携部門の活動を進めていくきっかけとして、北海道・東北・関東地区研修会において、「SMTの普及振興に向けて」のセッションを担当させていただいたことは、主管の関東地区をはじめとする皆様のご高配と、私への叱咤激励と思い、感謝いたしております。当

日の研修会において得られた参加者の皆さんの声は、今後の資格委員会社会連携部門の活動に向けて大きな布石となると思われるため、この場を借りて概要をご紹介させていただきたく思います。

当日の流れとしては、参加者の皆さんが現在行われている心理支援の内容を紹介していただいたうえで、社会連携を考えて行く上で切っても切れない関係にある、「研鑽」について議論し、その後普及・振興に向けて必要なことを考えていただきました。グループディスカッション中心の研修でしたが、議論は活発で、参加された皆様の普及振興への思いが感じられました。





上記の参加者からの意見は、Mentimeter という共有ツールで保存しています。そこから見えてきた、資格委員会社会連携部門として今後検討していくべき課題を整理してみたいと思います。

まず、資格を取得されている方の多くが大学に教員として、あるいはサポートスタッフとして、また大学院生として所属されており、サポートの対象は必然的に大学生競技者が多いことがうかがえます。一方で、中学校・高等学校部活動やエリートアスリートを対象としている事例は少なく、こうした分野への普及振興が望まれます。また、活動領域を広げていくためには選手の支援に携わるトレーナーや栄養士などのスタッフを対象にしたり、選手の親御さんに対しての支援や、スポーツ以外の領域(受験生やビジネスマン)といった意見

もありました。

普及に向けては、研鑽との兼ね合いが重要になりますが、研修会での意見を見てみると、より積極的な普及振興を訴える声も多くあります。様々な領域での事例を増やしていかないと、研鑽にもつながらないという論調がある一方で、研鑽を積んで実力をつけないと信頼を失ってしまうため、研鑽が優先という意見もあります。社会連携部門として悩ましく感じるのはこの点に尽きます。

いずれにせよ、社会連携部門の活動期間として私自身に残されている時間は短く、こうした声をどのように具現化するかという道筋を立てて、次の委員会にしっかりと引き継げるように、取りまとめをしていくことが肝要と感じております。

### Ⅲ.「日本スポーツ心理学会・スポーツメンタルトレーニング指導士資格認定 20 周年記念講演・シンポジウム」開催報告

## 資格認定 20 周年記念講演・シンポジウムの企画にあたって

資格委員会 武田 大輔 (東海大学)

2021年12月に、SMT 指導士資格認定 20 周年記念講演・シンポジウム(以下、記念シンポと表記します)を開催することができました。本来であれば、2020年に開かれるべきでしたが、この年は新型コロナウイルス感染症の本格的な拡大・蔓延によって、ジャンルを問わずすべての人々が生活様式や働き方など、あらゆるこれまでの習慣を変えざるを得ない状況でした。資格委員会も通常の業務をこなすことで手一杯だったというのが正直なところですが、一年遅れとなりましたが、無事に記念シンポを開催することができ、ホッとしております。記念シンポについてまとめた冊子ができあがる予定ですので、本稿では記念シンポを企画した経緯を述べたいと思います。

企画の発想の出発は極めて私の個人的な思いです。これまでに、日本のスポーツ分野・文脈において、アスリート支援あるいは心理サポートを実践してこられた多くの先達がおられます。それは、

各種出版されるスポーツ心理学の概論書において、日本の歴史が紹介される章からも知り得ることができます。2000年4月に本資格制度は発足しましたが、それはそれまでに多くの研究や実践が積み重なった成果を表していると思います。資格制度が発足してからは、いくつかの節目において、諸外国の著名な研究者や実践家が招聘され、我々は彼らのレクチャーを通して幅広い知識を得ることができました。それらも十分に価値あることではありますが、同じく日本で行われてきた研究や実践からも学ぶことはできると思っておりました。そして、日本の歩みを振り返る機会に、さらには概論書には書かれていない貴重な体験を聴くことができる機会になると良いのではないかと考えたのです。

このような考えを具体的な形にするにあたって、適任であろうと思う人が思い浮かびました。資格委員会委員長であり、国立スポーツ科学センター



\*\*\*\*\*

の心理グループ唯一の専任スタッフである立谷泰久先生でした。先に述べた私の思いを立谷先生にお伝えし、そして、日本の心理サポートに関する歴史について語るのには立谷先生が相応しいと強くお伝えしました。なぜ私が立谷先生が相応しいと考えたかについて述べたいと思います。これも極めて個人的な経験からです。2008年に北京オリンピックが開催され、その大会期間とその後数日のおよそ3週間ほどでしたか、立谷先生といっしょに北京で職務に励んでおりました。お互いに学びの背景が異なるので、スポーツ心理学や心理サポートにどのように出会い、学んできたのかについて互いに語ったのを覚えております。立谷先生からは多くのお話を聞くことができ、その内容は私が知らないスポーツ心理学の歴史が多くあり、とても新鮮でした。立谷先生は日本体育大学名誉教授の長田一臣先生に師事されていたのですが、長田先生がアスリートに関わる様子や、スポーツに対する思い、あるいは社会を俯瞰し洞察する様子など、たくさんのエピソードをお話ししてくださいました。それをきっかけに私は長田先生に強く関心を持ち、先生の著書を古本屋から入手したほどです。また、長田先生だけでなく、多くのスポーツ心理学の先生といっしょにお仕事をされた経験についても教えてくださいました。その時に、このような話はいわゆるスポーツ心理学の概論書には記述されないけれども、もっと多くの人達にも知っていただいた方がよいだろうと感じました。私は現在40代後半ですが、私の知らない多くのことを立谷先生は知っており、おそらく私よりも若い世代が歴史を語るのには今後難しくなるのではないかと感じました。そこで、この20周年という節目に、意味ある偶然のごとく委員長職に就かれているので、立谷先生が見聞きし、感じてきた日本の心理サポートの歴史を語っていただきたいとお願いいたしました。

私がかかなり強引に何度もお願いし続けたところ、立谷先生は快諾してくださり、せっかくなのでどなたか重鎮の先生とお話をしながら、その先生の当時の様子をさらに聞いてみたいというご提案を

いただきました。その際には、当然多くの先生のお名前が候補に挙がったのですが、立谷先生の大学院博士課程の指導教員であり、長くいっしょにお仕事をされたスポーツ心理学学会元会長であり、資格認定委員会委員長も歴任された石井源信先生（東京工業大学名誉教授、SMT 名誉指導士）にお願いすることになりました。私は石井先生に大賛成でした。これも私の勝手な思い出となるのですが、ここに記載させていただきます。ずいぶん前に石井先生が編著者の一人として編まれたスポーツ心理学の概論書があります（現場で生きるスポーツ心理学、杏林書院）。その概論書作成時に、執筆者のひとりとして私に声をかけていただきました。執筆のプロセスにおいて、私の書く内容が大学生には難しいのではないかとの意見が編著者の中で出たそうです。その際に、私の思いを石井先生が聴いてくださいました。私が学生の頃、手にしたスポーツ心理学の概論書は当時の私としてはとても難しかった。それでも私は、これはどうということなのだろうかと、難しくてもわかりたいという思いで必死に読みましたという、私の個人的な体験をお話させていただきました。石井先生は私の話を肯定も否定もすることなく、ただただじつと丁寧に聴いてくださいました。生意気で失礼極まりない私の話を丁寧に聴いてくださるその姿に、このような先生にサポートをしてもらう選手は安心して勇気を持って困難な道を進むことができるのだろうなあと感じたのを今でも覚えております。このようなプロセスで、立谷先生と石井先生によるセッションを計画した次第です。

次に、日本スポーツ心理学会における心理支援の歴史から学ぶといった主旨を、資質向上部門の先生方にお伝えし、さらに記念シンポが盛り上がるアイデアを募りました。その中で、もう一人くらいお話を聴いてもいいのではという話題になり、私は石村宇佐一先生（金沢大学名誉教授、SMT 名誉指導士）を推薦いたしました。これも個人的な思いとなります。石村先生が石川県を中心にご活躍されていることは間接的に聞いておりました。直接お話をする機会はあまりなかったのですが、

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

2012年のロンドンオリンピックでの日本のサポートハウスに足を運んでくださったり、同年に金沢星陵大学で開催された第39回スポーツ心理学会で声をかけてくださったりしました。いずれの時も優しさ満ちあふれる笑顔で「がんばってよ！」と温かく励ましてくださいました。僅かな時間しか接することがなかったのですが、その僅かな時間だけでも、サポートしてもらった選手は安心するだろうなあと感じました。そして、どのようなサポートをされているのかととても興味を持ちました。地域での活動はなかなかその様子を窺い知ることができないので、この機会にぜひとも拝聴したいと思い、基調講演をお願いすることになりました。これも良き偶然なのか、石村先生の愛弟子の一人である村山先生（金沢大学、資質向上部門員）が部門員としておられましたので、村山先生がコーディネートしてくだされば、間違いなく盛り上がり確信しておりました。

そして、記念シンポの後半は、資質向上部門員から、各地域の未来の展望を語ってもらうことで、過去から未来へと繋がっていく道が立体的に浮か

び上がってくるだろうと期待しました。部門員の小谷先生、平木先生、村山先生、筒井先生、崔先生、内田先生、そして部門長の秋葉先生らの普段の部門会議の熱い雰囲気そのまま参加者に伝わるだけで十分に有意義な時間になると想像しておりました。

以上が20周年記念講演・シンポジウムを企画した背景となります。極めて個人的な思いから出発しましたが、当日を迎え、登壇者のみなさまの語りには、私は十分に満足いたしました。会の冒頭で、画面の向こうにおられる聞き手のみなさまそれぞれが、ご自身の実践を振り返り、そして次にどのような歩みをしていくかを新たに想像できるような、そのような機会となれば嬉しい限りですと述べさせていただきました。いかがだったでしょうか。また次の30周年記念講演・シンポジウムでは、新たなテーマで盛り上がることを期待しております。

最後に、登壇してくださったすべての先生に感謝を表して、本稿を閉じたいと思います。

## 司会報告

### 記念講演：「心を鍛える先に想いを馳せて ～「教え」と「学び」のあゆみ～」

講師：石村宇佐一先生（金沢大学名誉教授）

村山 孝之（金沢大学）

SMT 指導士資格認定20周年を迎える記念講演として、SMT 名誉指導士の石村宇佐一先生にこれまでの歩みについてご講演いただきました。石村宇佐一先生は山口県のお生まれで、御年77歳でいらっしゃいます。金沢大学教育学部にて42年間に渡り教育研究活動を進められ、ご退職後は金沢星稜大学、金沢学院大学にて教鞭をとられました。2000年に資格認定制度が発足した時には金沢大学在職中であり、制度発足後の2001年に資格を取得されました（制度発足後、最初の取得者のお一人）。その後、2016年に名誉指導士の認定を受けられ今日に至ります。本講演では、スポーツメンタルトレーニングとの出会い、忘れられない“教え”と“学

び”、心を鍛える先に何をみるか、という3点についてご講演いただきました。

先生がSMTの研究に出会うきっかけはアメリカ留学にありました。元々バスケットボールのゲーム分析や、運動学習におけるフィードバック、観察学習、ならびに視線行動に関する実験研究を進めていらっしゃいましたが、在外研究員として1985年にカナダのケニヤス大学に留学された際、当時のバスケットボールコーチが「Mental Toughness」や「ZEN」の考えを活用していることを知ることになりました。日本には心理に関する独自の文化や考え方があるだろうと外国人コーチから教えられたことが今でも忘れられないとのことでした。

\*\*\*\*\*



\*\*\*\*\*

帰国後、先生はバスケットボール選手へのSMT研究を始められ、心理検査や脳波計測による効果検証から、徐々にSMTのパッケージ開発に研究テーマを移すこととなります。本講演では、パフォーマンス発揮に必要な集中、自信、冷静さの3要素を高めるための5ステップについての理論と実践を具体的にご紹介いただきました。多くの研究者やアスリートとの出会い、そしてその中で教えと学びを通して、海外の考え方や技法はもちろんのこと、日本独自の瞑想トレーニングやマインドフルネス、マインドセットの考え方もまた重要であるということを知ることになったか、どのように活用してきたかをわかりやすく紹介していただきました。また、先生がスポーツ以外の教育、ビジネス、芸術、健康の分野を対象にしたSMTについても熱心に研究され、多くの学びを通して地域貢献をされてきたこともご紹介いただきました。

そして最後に、“心を鍛える先に何をみるか”と

いう点について、長きに渡る研究生活を通してのお考えをお話いただきました。まずは「成長のためのマインドセット」が必要であり、SMTの土台に、しなやかな心を持つためのハーディネスとレジリエンスの強化が必要であることを説明されました。さらに、競技生活を主とするSMTの5ステップはもちろんですが、心を鍛える先にはやはり人間的な成長がなくてはならず、「ライフサイクルの中で自分を磨く5ステップ」をモデル化すべく、現在検討中であるとお話をいただきました。

講演の最後に示してくださった、“前を見、後ろを見るのが賢明というものだ”というホメロスの言葉は、今もなお歩みを続ける先生から我々後進へのメッセージであったかと感じております。資格発足20周年という節目を迎えるにあたり、あらためてSMT指導士の資格を持つことの意味や、資格を有する者としての責任について再考する貴重な機会をいただきました。司会として、石村先生にはこの場をお借りしてあらためてお礼申し上げる次第です。

## SMT 指導士資格認定 20 周年記念講演・シンポジウム

秋葉 茂季 (国士舘大学)

2021年12月、無事にSMT指導士資格認定20周年記念講演・シンポジウムを開催することができました。改めてご尽力いただいた関係者の方々、ご登壇頂いた先生方に御礼申し上げます。

ここでは、資質向上部門の部門員の先生方と一緒に登壇させていただいた「話題提供：各地域におけるこれまでとこれから」と「ディスカッション：地域における実践活動と研鑽について」を設けた経緯から振り返らせていただけたらと思います。我々、資質向上部門は、現在、小谷先生（北海道・東北）、平木先生（関東・東京）、村山先生（東海・北信越）、筒井先生（関西・近畿）、崔先生（中国・四国）、内田先生（九州・沖縄）、そして私というメンバーで取り組んでおります。実は、このセッションの企画自体は、資格審査部門の部門長である武田先生によるご提案が発端でした。武田先生

が我々資質向上部門の部門会議にオブザーバーとしてご参加して下さった際に、このような議論をそのまま資格取得者や資格取得を目指す方々に見ていただいたら良いのではないかとご提案いただき、どこかで機会を設けられたらと考えていたところ、本会の企画があり、他のセッションとの繋がりも良かったため開催させていただく運びになりました。

普段、我々資質向上部門では全国研修会の開催に向けた企画だけでなく、各地域の実践活動や研鑽・研修活動の現状を情報交換することや各部門員の先生方がこれまで実践してきた心理支援や研鑽・研修についても共有しています。資質向上部門としては、SMT指導士として活動する方々（特に若手の方々）に、技法や方法論を学ぶことに加えて、実践活動を通じた経験を事例検討会で発表

\*\*\*\*\*



し、様々な意見を受け止めながら自分らしい実践のあり方を学んでほしいと考えています。しかし一方で、実践の場がなかなか得られていないのではないかと、現場があったとしてもどのように現場に入っていくかといった教科書的な知識では補いきれていないところがハードルとなって踏み出せていないのではないかと、なども話し合われています。さらには、ここで取り上げた現場での経験とはどのようなものを指すのかということや、このような課題を取り上げるにはどのような研修方式が望ましいのかなども話し合われています。部門員同士の学術的背景は異なるものの、それぞれの意見は尊重され、本当に率直な議論が交わされていると感じております。当日は、少し改まってしまったことと地域の現状においてSMT指導士を

目指す人の人数に地域格差があることなどが注目されたため、なかなか議論が深まらなかったことでもあります。それでも普段我々がおこなっている議論を垣間見ていただけたのではないかと思います。何か感じていただけていたら嬉しく思います。

20周年という節目において、石村宇佐一先生（金沢大学名誉教授、SMT名誉指導士）や石井源信先生（東京工業大学名誉教授、SMT名誉指導士）といったこれまでアスリートの心理サポートを支えてこられた先生方にお話いただいた後に、我々のように現在それを繋ごうとしている者同士が未来展望的な議論ができたことは、今後の資格の発展にとって意味があったのではないかと考えています。

**IV. 資格取得者の抱負**

**念願のスポーツメンタルトレーニング指導士**

平間 康允 (酪農学園大学大学院・札幌学院大学)

私がSMT指導士の資格を取得して、1年余りが経過しようとしています。この1年は、夏季は東京、冬季は北京でのオリンピック・パラリンピック開催に、スポーツに携わる者として心躍った一方で、直近のロシアによるウクライナ侵攻とそれに伴うロシア・ベラルーシ両国選手のパラリンピック出場が認められなくなったことに、心を痛めてもいます。一刻も早く事態が収拾され、世界中が平和に過ごせ、スポーツを楽しめる時が来ることを心より願っております。

さて、標記の通り、私はSMT指導士資格取得をかねてより強く望んでおりました。話は学部時代に遡りますが、当時所属していた大学野球部は部員数100名を超える大所帯で、全くの無名選手である自分が活躍するシーン等、想像もできませんでした。「何か他の人と違うことをしなくては埋もれてしまう」と感じた私は、考えた挙句、まずは「トレーニングで徹底的に身体を鍛える」ことにしました。体格や体力の増強はある程度のバ

フォーマンス向上をもたらしてくれましたが、次に待っていたのは「緊張・不安によるパフォーマンス発揮の阻害」でした。練習でできていたことが試合で急にできなくなる悔しさ・もどかしさを幾度となく経験し、最終的に辿り着いたのがSMTだったのです。呼吸法によるリラクゼーションや、音楽を活用したサイキングアップ等、些細なことでパフォーマンス発揮がスムーズになることを実感した私は、チームメイトにも積極的に勧めました。ところが、取り入れてくれる部員は少なく、「皆どうしてやってくれないのだろう。。。」と悲嘆にくれたことを今でも憶えています。その後、試合で勝てない時期が続き、チーム内の人間関係も悪化してしまいました。これらの出来事が、大学院で本格的にスポーツ心理学を学ぶ動機づけに繋がったのです。大学院進学後は、指導教官である佐川正人先生、研修会でいつもお世話になっている蓑内豊先生や小谷克彦先生、長年現場でアスリートの心理サポートに従事されている吉田聡美先生を





はじめとする多くの方々のご指導を頂き、「身体と同様に、心にも正しい鍛え方があること・選手の数だけアプローチ法があること」等を理解することができました。同時に学部時代の失敗も踏まえ、「SMTの意義を正しく伝えていきたい」という使命感に似た感情も抱いたことが、資格取得を志した理由です。

資格取得を目指すにあたり、いくつかの問題にも直面しました。最大の問題は研修時間の確保でした。当初、関係者にSMTの導入を提案しても、「そういうの(SMT)より、根性の方が大事じゃない？」等といった返答が多く、思うように研修ができなかった苦い思い出もあります。しかしながら、学部時代と違い、自分の経験以外に科学的知見やデータを用いながらSMTの重要性を説くことで、受け入れてくださるチームや指導者が少しずつ増え、無事に研修を終えることができました。その方々とのお付き合いは現在でも続いており、今回の資格取得によって、ようやく恩返しを始められるという思いで一杯です。そんな中、先日嬉しい出来事がありました。心理サポートをしている選手から、「大会のスタート前、緊張でパニックになりか

けましたが、普段トレーニングでやっている呼吸法を思い出してやってみたら、フッと気持ちが落ち着き、普段通りに滑ることができました！記録も自己ベストが出ました！」というメッセージが届いたのです。涙が出るほど嬉しく、「普段通り・自己ベスト」という言葉に、深い安堵感を覚え、こういった経験ができるSMT指導士という立場を、改めて誇らしく思いました。

私が暮らす北海道では毎年、道体育協会がSMT実施状況等について報告書をまとめていますが、SMTの実施率は決して高くはありません。しかしながら、「SMTに興味がある・機会があればやってみよう」という声は多く見受けられます。最近ではそのような声に応え、SMTの意義を伝えていく草の根活動を少しずつ展開している状況です。まだまだ経験も知識も足りておりませんが、資格取得研修会の際に講師の先生方が口を揃えて仰っていた「自己研鑽・学び続ける姿勢」を忘れずに、選手のため、スポーツ界の発展のために努力を重ねていく所存です。今後とも宜しくお願い申し上げます。

## SMT 指導士の資格を取得するまでの過程と今後の歩み

高橋 由衣 (JISS)

私は高校時代のバレーボール部の恩師に憧れ、将来は高等学校の保健体育教諭になることを夢みて、体育大学に進学することを決意しました。大学の4年間はバレーボールに明け暮れる毎日で、四六時中、バレーボールのことを考えて生活していました。そんなバレーボール一色だった私が大学院に進学し、スポーツ心理学を学び続けることを選択した理由は自分自身の強みを作りたいと思ったからです。大学入学時に抱いていた保健体育教諭になるという目標と真剣に向き合った際に「本当にこの道でよいのか？」と自分自身に迷いが生じました。これまでのバレーボール人生を振り返ってみると、私は全国大会上位レベルの成績を

残した経験もなければ、特別に優秀な選手だったわけでもありません。私自身の経験だけでは強いチームを育てることはできないのではないかと考え抜いた末に、ゼミで学んだスポーツ心理学についてもっと勉強したいと思うようになりました。その後、大学院でスポーツ心理学に関する研究活動と実践活動に取り組む中で、スポーツ心理学の専門家として指導の現場に携わりたいという思いが強くなり、SMT指導士を目指すことにしました。

大学院に進学してから現在に至るまで、スポーツ心理学に関連する研究活動を実施することはもちろん、大学生アスリートを対象に心理講習会を実施したり、メンタルトレーニングなどの研修会





に参加したりと、数多くの学びと出会いがありました。大学院生から現在の職に就くまでは、日体大アスリートサポートシステムの心理サポートスタッフとして実践活動に携わってきました。当時は、一緒に活動を行っていた心理サポートスタッフと心理講習会の内容について意見を出し合ったり、心理サポート終了後には「この内容でよかったのだろうか」、「もう少し違う伝え方があったのではないだろうか」と反省会を行ったりするなど、アスリートにとって最良の心理サポートを提供しようと努めてきました。私は約5年間、日体大の心理サポートスタッフとして実践活動に携わってきましたが、ご指導いただいた先生方をはじめ、SMT指導士の資格を持つ先輩方、同じ志を持つ同期や後輩と共に歩むことができたからこそ、今があると感じています。

私にとって、SMT指導士の資格取得がスポーツ心理学の専門家としての第一歩目であり、ゴールではありません。スポーツ心理学という学問を追求し続ける限り、ゴールは現れないものであると思いますので、常に自分自身をアップデートできるよう努力し続けたいと思います。また、資格取得の現状に満足することなく、これまで以上に研修会や事例検討会等に積極的に参加し、自分自身と向き合う機会を設けていきたいと考えています。今後は、SMT指導士の資格取得者として、アスリートの競技人生の一部に関わっているという自覚と責任を持ち、アスリートの競技人生を少しでも豊かにできるように努めて参ります。そして、アスリートの競技力向上のために現場で生きるエビデンスの構築にも貢献したいと思います。

**V. 研修会・傍聴記**

**学会主催研修会に参加して**

**伊藤 麻由美 (帝塚山大学)**

11月23日(火)に開催された「スポーツメンタルトレーニング指導士研修会(Web開催)」に参加しました。今年は「心理サポートの多様性にふれる」というテーマのもと、研修が行われました。SMT指導士はアスリートやチームの多様な課題に取り組むだけでなく、最近では新型コロナウイルス感染拡大の観点から、オンラインでのサポートも求められています。SMT指導士の専門性として最低限身につけるべき知識を学ぶだけでなく、多様な実践活動にふれることで、サポート提供者として何が求められているのか、自分にできる範囲はどこか、などと考える機会になりました。

した後でも、多様なサポートのあり方を考えていく上で有意義な内容でした。なかでも、面接の「枠」や場(空気感や雰囲気)をどのように作っていくかはサポート契約や関係づくりにとって重要な観点であり、クライアントへの理解だけでなく、自分自身がどこまで対応可能なかを明確にしておく必要があると感じました。

まず、研修1では「遠隔による心理サポート」というテーマで、中村洗太先生からオンラインサポートについてレクチャーがなされました。オンラインサポートのメリットと課題、オンライン(ビデオ電話)でサポートを行う際の留意事項について話題があり、今後、新型コロナウイルスが収束

研修2では、「アスリートを対象とした遠隔サポート」というテーマで、江田香織先生と筒井香先生から話題提供がありました。事例等から遠隔サポートで良かった点や課題、配慮すべき点について議論され、また研修1の内容とも関連があり、理解を深めることができました。特に、遠隔になることで生じる感情の発生については、人と人が直接会うこととはどういうことなのか?、面接の枠の役割は何なのか?と、考えさせられる内容でした。遠隔でのサポートだからこそ生じた問題や出来事を丁寧に扱っていくことは、クライアント



\*\*\*\*\*

とより良いサポートのあり方をつくっていくために重要な作業であると思いました。

研修3では、「サポート記録はなぜ必要か」というテーマで、小谷克彦先生、谷内花恵先生、武田守弘先生から話題提供がありました。サポート記録は、サポート内容を書き記す“作業”だけでなく、どのように記録を残すかによって、多様な役割を持つと思います。研修では、クライアントの語りだけでなく、サポート提供者の体験を振り返ることの意味について話題があがりました。サポート提供者が、自分自身の感情や身体感覚の変化にも目を向けておくことが、クライアントのストーリーや関係性を理解する上でのヒントとなり、どう記録するかにも関連していくと思いました。また、チームへのサポートは一人ひとりの記録を残すことの限界もある中で、サポート内でアスリート自身が体験や振り返りを記入し、そこにサポート提供者がコメントを残されていました。アスリートと記録内容を共有することで変化や課題を共有

するだけでなく、お互いを理解し合い関係を構築していくことができると感じました。サポート記録を残す目的は、アスリートとサポート提供者の関係性をより理解し、サポート内容を充実させることにあると思います。学会（事例）発表のために記録を残すわけではないですが、サポート記録を丁寧に残し、それを発表し議論してく場が、より一層求められると感じました。

今回の研修会では、多様な観点からスポーツメンタルトレーニング指導士としてどうあるべきか、を考える機会となりました。多様なサポートのあり方が求められている一方で、このような環境下だからこそサポート内容を再度振り返ること（形式的なことから内的な体験も含めて）が、今後のサポートを発展させていく上で重要であると感じました。最後に、研修会でご登壇された先生方をはじめ、研修会を開催して下さった方々に心より感謝申し上げます。

## 2021年度 SMT 指導士研修会に参加して

小笠原 佑衣 (大阪体育大学大学院)

2021年度のスポーツメンタルトレーニング研修会は「心理サポートの多様性にふれる」というテーマのもと、①オンラインサポートについて、②アスリートを対象とした遠隔サポート、③サポート記録はなぜ必要か、という3つのセッションが実施されました。特に印象深かったお話を中心に、各セッションの感想を書かせていただきます。

研修1の「オンラインサポートについて」というセッションでは、NPO 法人日本オンラインカウンセリング協会の中村洗太先生よりオンラインサポートの手段や課題、メリット、デメリット、今後の展望などをお話していただきました。Zoom や Google Meet のような Web 会議ツールだけでなく、電話やテキストでの相談もオンラインサポートに含まれることを知り、オンラインサポートの手段の多さに驚きました。また、それぞれのメリッ

トやデメリットを詳細にお話していただく中で、心理サポートの「正しさ」にこだわってしまうが故に、オンラインサポートを実施しない理由を探していた自分の柔軟性のなさに気づくことができました。これまでの心理サポートを振り返ると、対面だから良かったこともあれば、対面であるが故に生じてしまった問題もあります。それはオンラインサポートにも言えることであり、オンラインサポートだからこそ相手から引き出せる情報もきっとあるのではないかと、このセッションをきっかけに考えるようになりました。今後の展望にあった「対面 vs オンラインの対立構造ではなく並列の選択肢の一つにする」という言葉が印象的で、相手やその時々状況に合わせて柔軟に心理サポートの形を変えられるよう、自分自身の支援のチャネルを少しずつ広げていきたいと思いました。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

研修2の「アスリートを対象とした遠隔サポート」というセッションでは、国立スポーツ科学センターの江田香織先生と株式会社 BorderLeSS の筒井香先生が実施された実践のお話を伺いました。このセッションでもオンラインサポートの話題が中心になりましたが、江田先生の「(コロナ禍の初期に) 万全の準備ができていたわけではなかったが、遠隔サポートの実施を即決した」というお話や、筒井先生の「柁を守ろうとすると支援が立ち行かなくなることもあるため、柁の重要性を理解した上で時に柁を崩すことも必要」という言葉が特に印象に残っています。コロナ禍初期の大阪体育大学 SMT チームでは、先例のないオンラインサポートへの懸念から、オンラインサポートを実施するまでに沢山の議論を重ねていました。この時間は、私たち初学者にとっては非常に有意義なものになったのですが、サポートを受ける側にとっては何もないも同然の時間になります。初学者である私たちがこのときどのように動くべきだったか、という答えは未だに見つかりません。そもそも答えなどないのかもしれませんが、今後同じようなことが起こったときに支援者として、「支援を途切れさせないための“即断”」という選択もできるようにになりたいと感じました。

研修3の「サポート記録はなぜ必要か」というセッションでは、北海道教育大学の小谷克彦先生、国立スポーツ科学センターの谷内花恵先生、広島文化学園大学の武田守弘先生より、サポート記録の重要性や意義について、3者それぞれの視点からお話していただきました。その中でも「心理サポ-

ートを実施する中で“つながらなさ”や“わからなさ”を経験するが、“つながらないこと”が大切で、その“つながらなさ”や“わからなさ”こそが記録すべき情報ではないか」というお話が心に残っています。心理サポートに携わる中で、相手への“わからなさ”に悩むことが多々あります。その“わからなさ”が自分にとって非常に苦しい状態であるため、「理解しなければならぬ」と焦って行動しては失敗をし、時には「わかったふり」をしてしまい反省をする、サポート記録を見返しては「原因を探る」、ということを繰り返していました。心理サポートの経験が浅い私は「“つながらないこと”が大切」というお話の真意をまだ完全には理解できていません。しかしながら、心理サポートに携わる中で、これはとても大切な視点なのではないかと考えています。いつかこの視点と自分の経験が一致するよう、“わからなさ”や“つながらなさ”を大切に、時にスーパーバイズを受けながら、今後も研鑽を続けていきたいと思います。

今回の研修会を通して“心理サポートの多様性にふれる”ことで、悩み立ち止まることが多かったコロナ禍での心理サポートに、良い意味で開き直って取り組もうと思えるようになりました。初学者である自分にできることはまだ限られていますが、研修会で学んだことを活かしながら、少しずつサポートの柁を広げていけるように努めたいと思います。最後に、研修会を開催していただいたスタッフの皆様、ならびにご登壇いただいた講師の先生方に心より御礼申し上げます。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

## VI. 事務局からのお知らせ

- (1) **有資格者数**:令和4年3月末現在で資格が有効な指導士は168名(名誉指導士18名、上級指導士39名、指導士111名)。令和2年度に資格を移行・更新された方は以下のとおりです(敬称略)。
- ・名誉指導士:該当者なし
  - ・上級指導士更新:石井聡、武田大輔、立谷泰久、田中美吏、森司朗(以上5名)
  - ・上級指導士への移行:村山孝之(以上1名)
  - ・指導士更新:朝西知徳、浅野友之、遠藤拓哉、奥村基生、片上絵梨子、柄木田健太、熊谷史佳、村上貴聡(以上8名)

### (2) 令和2年度事業報告

令和3年度の資格委員会に関わる事業は表1のように実施されました。

表1 令和3年度 資格委員会事業報告

	事務局	資格委員会
令和3年4月	申請書類の受付(4月~6月末)	
5月		
6月	書類の受付締切(末日)	
7月	申請書類のチェック 資格委員会開催の案内	第1回資格委員会:申請書類審査,研修会・講習会の計画, 前年度収支決算
8月	書類審査結果の通知	
9月		
10月		
11月	資格更新・移行手続きの受付(11月~12月末)	第2回資格委員会 資格取得講習会(11/20(土))、SMT指導士全国研修会 (11/23(火・祝)) ※いずれもオンライン開催
12月	最終審査の案内(新規資格取得者)	日本スポーツ心理学会・SMT指導士資格認定20周年記念講演・シンポジウム(12/11(土)) ※オンライン開催
令和4年1月	資格更新・移行書類のチェック	
2月		
3月	最終審査料の謝金支払い,合格通知,資格認定者の名簿作成,認定書の作成(更新者含む)	第3回資格委員会:新規申請者の最終合否判定,更新・移行の合否判定,収支中間報告

### (3) 令和3年度スポーツメンタルトレーニング指導士研修会・資格取得講習会プログラム

#### ①指導士研修会

日時:令和3年11月23日(火・祝)10:00~16:00(受付:9:30~)

会場:オンライン開催

参加費:a.資格取得者:3,000円 b.一般学会員:5,000円 c.大学院生:4,000円

参加者数:140名

研修内容:

9:30~ 受付

10:00~10:20 資格委員会委員長・資質向上部門長 挨拶

資格委員会委員長:立谷 泰久(国立スポーツ科学センター)

資質向上部門長:秋葉 茂季(国士舘大学)

10:30~11:45 研修1 「遠隔による心理サポート」

司会:荒井 弘和(法政大学)

講師:中村 洸太(NPO 法人日本カウンセリング協会)

質疑応答(15分)

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

- 13:00～13:45 研修2 「アスリートを対象とした遠隔サポート」  
ファシリテーター：荒井 弘和（法政大学）  
話題提供者：江田 香織（国立スポーツ科学センター）  
話題提供者：筒井 香（BorderLeSS）  
対談（30分）  
コメンテーター：中村 洸太（NPO 法人日本カウンセリング協会）  
オンラインディスカッション（20分）
- 14:00～15:00 研修3 「サポート記録はなぜ必要か」  
ファシリテーター：秋葉 茂季（国士舘大学）  
話題提供者：小谷 克彦（北海道教育大学）  
話題提供者：谷内 花恵（国立スポーツ科学センター）  
話題提供者：武田 守弘（広島文化学園大学）  
対談（45分）
- 16:15～ 閉会の挨拶

## ②指導士資格取得講習会

日 時：令和3年11月20日（土）10:00～16:00

会 場：オンライン開催

令和3年6月末までに資格委員会事務局に所定の申請書類を提出し、書類審査に合格した4名が受講。

### 【プログラム】

総合ファシリテーター：武田大輔（東海大学、資格委員会 副委員長 資格審査部門長）

10:00～10:10 資格委員会委員長による挨拶

立谷泰久（国立スポーツ科学センター）

I. 10:10～11:00 資格と責務

講師：山本裕二（名古屋大学、日本スポーツ心理学会 会長）

II. 11:10～12:00 対象者の特性・特徴を考えたサポートの重要性

講師：立谷 泰久（国立スポーツ科学センター、資格委員会 委員長）

III. 13:00～13:50 SMT 指導士の社会連携における、情報発信の際の注意点

講師：菅生 貴之（大阪体育大学、資格委員会社会連携部門長）

IV. 14:00～14:50 自己研鑽の意義と資質向上の機会

講師：秋葉 茂季（国士舘大学、資格委員会資質向上部門長）

V. 15:00～15:50 事例検討をすることの意味

講師：武田 大輔（東海大学、資格委員会 副委員長 資格審査部門長）

## (4) 記念事業

日本スポーツ心理学会・SMT 指導士資格認定20周年記念講演・シンポジウム

日 時：令和3年12月11日（土）10:00～17:00

会 場：オンライン開催

参加費：a. 一般学会員：4,000円 c. 大学院生：2,000円

参加者数：87名

### 【プログラム】

10:00～10:10 開会式

\*\*\*\*\*



\*\*\*\*\*

挨拶：日本スポーツ心理学会 会長 山本裕二（名古屋大学）

10：10～12：00 セッション1 司会：武田大輔（東海大学）

「我が国における心理サポートの歴史」（45分）

立谷 泰久（国立スポーツ科学センター）

「対談：我が国における心理サポートのこれまでとこれから」（60分）

立谷 泰久（国立スポーツ科学センター）

石井 源信（東京工業大学名誉教授、SMT 名誉指導士）

13：00～14：00 セッション2 司会：村山孝之（金沢大学）

記念講演：「心を鍛える先に想いを馳せて～「教え」と「学び」のあゆみ～」

石村 宇佐一（金沢大学名誉教授、SMT 名誉指導士）

14：15～16：30 セッション3 司会：秋葉茂季（国士舘大学）

「各地域におけるこれまでとこれから」（10分×6）

- ・北海道・東北 小谷 克彦（北海道教育大学）
- ・関東・東京地域 平木 貴子（日本大学）
- ・東海・北信越 村山 孝之（金沢大学）
- ・関西地域 筒井 香（株式会社 BorderLeSS）
- ・中国・四国 崔 回淑（IPU 環太平洋大学）
- ・九州・沖縄地域 内田 若希（九州大学）

「対談：地域における実践活動と研鑽について」（60分）

資質向上部門 部門員（6名）

16：40～ 閉会の挨拶

挨拶：日本スポーツ心理学会 副会長 土屋 裕睦（大阪体育大学）

## (5) 資格更新・移行

資格の有効期限が令和5（西暦2023）年3月31日までの方の更新・移行手続き期間は令和4年11月～12月末日までです。個々に連絡はしていませんので有効期限を必ずご確認ください。なお、資格更新・移行の審査料は不要です。手引き、規約等の文書や必要書類等はHPに掲載されています。ダウンロードをしてご利用ください。

- ・申請には必要な研修ポイントが定められており、それを証明する証明書や領収書等のコピーの提出が求められます。研修会・学会等に参加されたときには各種証明書を受け取り、保管しておいてください。

## (6) その他

令和2年度より、情報の一元管理を図るため、日本スポーツ心理学会の会員名簿とSMT指導士名簿の情報を統合することになりました。ご所属先、ご住所、連絡先等を変更された方は早めに学会事務局（kanri@jssp.jp）までご連絡ください。

## (7) 令和4年度事業計画

本年度の資格委員会に関わる事業は表2のように計画されています。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*



表2 令和3年度 資格委員会事業計画(案)

	事務局	資格委員会
令和4年4月	申請書類の受付(4月~6月末)	
5月		
6月	書類の受付締切(末日)	
7月	申請書類のチェック 資格委員会開催の案内	第1回資格委員会:申請書類審査,研修会・講習会の計画, 前年度収支決算
8月	書類審査結果の通知	
9月		
10月		
11月	資格更新・移行手続きの受付(11月~12月末)	第2回資格委員会 資格取得講習会、SMT指導士全国研修会 ※学会大会に合わせて実施(令和4年9月30日予定)
12月	最終審査の案内(新規資格取得者)	
令和5年1月	資格更新・移行書類のチェック	
2月		
3月	最終審査料の謝金支払い,合格通知,資格認定者の名簿作成, 認定書の作成(更新者含む)	第3回資格委員会:新規申請者の最終合否判定,更新・移行 の合否判定,収支中間報告

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

平成31年度・令和元年度 決算報告

令和2年度スポーツメンタルトレーニング指導士資格委員会収支決算報告		
一般会計		
収入		
1. 新規資格	認定審査料 10名(各10,000) 講習会受講料 10名(各5,000) 最終審査料 10名(各5,000) 登録料 10名(各30,000)	100,000 50,000 50,000 300,000 計 500,000
2. 更新登録料	移行・更新1回目 8名(各30,000) 更新 10名(各10,000) 調入金	240,000 100,000 10,000 計 350,000
3. 指導士研修会参加費(オンライン開催 11月23日)	資格取得者 100名(3,000) 大学院生 34名(4,000) 一般 37名(5,000)	300,000 136,000 185,000 計 621,000
4. 教本印税		236,453
5. 利子		3
収入小計		1,707,456
前年度繰り越し金		1,703,992
収入合計(A)		3,411,448
支出		
1. 資格認定委員会 旅費及び会議費 ※オンライン開催のため支出無し		0
2. 指導士会研修会 地区研修会開催補助金		300,300
3. 資格取得講習会 講師謝金、運営経費		131,007
4. 最終審査謝金	10名分(各5,000)	51,760
5. SMT指導士全国研修会 講師謝金、会場使用料、運営経費 他		559,792
6. ニュースレター 印刷代 他		90,640
7. 認定カード・認定証 作製費 他	34名分	120,120
8. 事務局経費(人件費、HP作成費用、郵送料 他)		403,754
9. 記念事業準備金		0
10. 事業費(統合ワーキング、部門活動 他)		61,200
11. 調査活動費(東京2020サポート体制構築調査活動費)		0
支出小計(B)		1,718,573
次年度繰越金(A) — (B)		1,692,875
支出合計		3,411,448
特別会計：記念事業準備金		
前年度残高		3,500,000
貯金利息		30,318
残高		3,530,318
〈会計監査報告〉		
スポーツ心理学会資格委員会の会計監査を行い、領収書等のすべての会計書類を照合した結果、決算報告通り、相違ないことを認めます。		
令和3年5月28日		
監査	阿江 美恵子	
監査	関矢 寛史	

\*\*\*\*\*



## 編集後記

スポーツメンタルトレーニング指導士ニュースレター第19号をお届けいたします。

史上初のオリンピック/パラリンピックの開催延期の決定がなされ、無観客というこれもまた史上初めての試みとなったものの、東京オリンピック/パラリンピックは無事開催されました。オリンピックでは史上最多の金メダル27個を獲得し、アメリカ(金39)、中国(金38)に次ぐ成績となり、コロナ禍でスポーツ界にとっては難しいかじ取りであったにもかかわらず、成果を上げられたことには、強化現場の皆様に深く敬意を表したいと思います。

一方、改めてスポーツというものの世間一般の評価や関心について考えさせられることも多い一年であったと感じています。オリンピック/パラリンピックは単にスポーツ競技会という枠を超えた国家的な一大イベントであり、もはや外交儀礼の一つともいえるような立場にあると思います。私自身はこの困難な渦中でも、国民はオリパラの開催を支持してくれるだろうと、ある意味楽観していました。しかし、現実的には、批判の声が圧倒的であり、このようなさなかにスポーツなどやっている場合ではない、とか、オリパラなどに税金を大量につき込むとは何事か、という声が満ちていたと思います。

私たちスポーツ選手に関わり支援する者にとっては、スポーツは夢があり、人を勇気づける力があると信じていますが、世間一般ではそうではない人もたくさんいることを改めて痛感いたしました。

そうした中で、私たちスポーツメンタルトレーニング指導士は、単にスポーツ選手が競技者として成功することだけを支援していればよいわけではなく、スポーツそのものの社会的地位向上のために何ができるかも考えなくてはならないのではと感じます。今年度のニュースレターでは、資格委員会が実施した研修会の内容を報告していただきましたが、資格委員会に申請を頂いている各地区研修会の内容も含めまして、皆様の研鑽への思いが伝わってくる思いがして、スポーツの社会的地位向上に強く期待感を感じているのも事実です。こうした期待感をもって、指導士の皆様がよりご活躍されることを祈っております。

最後になりましたが、急なお願いにもかかわらず早く原稿を提供していただいた執筆者の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。(菅生貴之)

日本スポーツ心理学会認定  
スポーツメンタルトレーニング指導士

ニュースレター 第19号  
2022年(令和4年)5月31日発行

編集・発行

日本スポーツ心理学会スポーツメンタルトレーニング指導士資格委員会

事務局

〒115-0056 東京都北区西が丘3-15-1  
国立スポーツ科学センター 心理グループ内(立谷泰久)

E-mail: [jssp\\_mtcs@yahoo.co.jp](mailto:jssp_mtcs@yahoo.co.jp)

郵便振替口座 口座番号 00800-8-120103  
口座名称 日本スポーツ心理学会資格認定委員会

